

「命果報」のうた

沖縄県立首里高等学校三年 池原 輝飛

戦世やしぬじ命果報や受きてい
ちなぐ糸ぬ命平和願ら

二〇二一年、今年のつゆは少し早かった
街を歩けばたくさんの音楽が
テレビを見れば色々なニュースが
世間を賑わせている
学校に行けば
うるさい程の人々の声
家に帰れば
何の心配もなく眠りにつける

一九四五年、降りしきるものは砲弾の雨
撃たれてしまえば命はない
どこを歩いても
目に入るものは死体の道
聞こえてくるものは飢えと乾きの悲鳴
少年少女も兵や看護に加担させられ
成長期の彼らに与えられるものは
ほんのわずかな米だけ

あなたは信じられるだろうか
あたりまえのように
毎日が殺される時代を
人権なんて
微塵もない時代を

どこか他人事のように感じてしまう
目を背けたくなる
だけどそれは
まぎれもない事実
我々が向き合って
伝えなければならぬ事実

そんな事実を
私たちは受け止めなければならぬ
二度とくり返さないように
伝えなければならぬ

泣いた赤子を殺す母
いったい誰が悪いのか
知らない誰かに撃たれた兵士
いったい誰が悪いのか
そんな
やり場のない怒りと
どうしようもない悲しさ
それすらも感じられず
死んだことすらも気づかれずに
死んだ人達

それでもこの島の人たちは
明るい未来を待ちつづけた
いつかまた
街が音で溢れる日が来ることを
たのしく笑い
お腹いっぱいのご飯を
食べられる日が来ることを
そんな戦争を生き抜き

「命果報」を受けた人々
それを
つなぎつないで受けた
我々の命果報

胸を張って叫ぼう
「命果報」のよろこびを
声をあげて伝えよう
戦争の悲惨さ
命の尊さを

戦世やしぬじ命果報や受きてい
ちなぐ糸ぬ命平和願ら